

日本口承文芸学会 会報

【伝え】 第40号 2007年3月

〒263-8522

千葉県稲毛区弥生町 1-33

千葉大学文学部 荻原眞子研究室

Tel/Fax : 043-290-2310

追悼 白田甚五郎先生

野村 敬子

日本口承文芸学会の生みの親の一人、白田甚五郎先生の訃音に接した。2006年10月26日(木) 8時10分 自宅でご逝去 享年91歳であった。「朝日新聞」には病名が前立腺癌とある。大田区臨海斎場にて30日通夜、31日に告別式が行われた。本学会では荻原会長自ら手配した供花弔電をもって鄭重なる弔意を表した。白田先生は会長を辞した後は本学会名誉会員となられたが、人徳を偲び全国から多数の会葬者がみえられた。

白田先生は晩年、視力を失われた。白い闇だとおっしゃられていた。しかし学問への情熱は白い闇を通して、ひときわ透明感を増していかれる様子であった。口承文芸における国立資料保存館の切要、外国と政治外の伝承文化圏調査外交など学問の向かう大枠について話された。白い闇にも夢の通り路は色彩豊かな記憶の扉を開くという。ヘルシンキの国際口承文芸研究会議やフィンランドのカレワラの感動、外国研究者との交流の思い出にことよせ口承文芸学会の国際化の夢を拝聴したのが最後となった。思えば教え子の一人として折りある毎に先生の夢を聴かせて頂いた。古い話になるが60年安保で揺れるキャンパスから先生は私を引き剥がし、昭和女子大学での説話研究会に連れて行って下さった。そこでスピーチは当時としては単なる夢に違いなかったが、私の生涯の宝となっている。「浮き足立つ時こそ採訪で識った日本を凝視、農山村の人々の言葉で伝える文芸を研究したい。口承文芸は国文学や民俗学の一斑としてではなく口承文芸学として独立した学問にするのが白田の夢」と力説された。共感された木俣修先生が握手して下さいたのも忘れ難い。

後年、それが柳田国男・折口信夫の学際的しがらみを見込むスピーチと識るところとなったが、機は熟し、関敬吾先生、外の方々との意気投合で口承文芸学会創立の日を迎える。夢結実の経緯は「口承文芸研究」第1号「彙報」に先生の筆で詳しく綴られている。

先頃本学会理事会で荻原会長のグローバル路線、間宮史子理事の国際口承文芸学会での活動を承り、先生最後の夢も確実に始動していると霊前に報告したところである。

(東京都)

第52回研究例会 「中国の正月風景」

2006年10月21日(土)

会場 慶應義塾大学(三田)第一校舎3階 132号室

百田弥栄子

中国には「正月」は(陰暦)十二月二十三日から正月十五日までという観念がある。二十三日(南は多く二十四日)に家々の竈の神はあまたの諸神を引き連れて天へ昇り、大晦日にうちそろって下凡する。といっても実際は正月一日(春節)の明け方になるし、地方によっては神々のお戻りがそれより遅い所もある。するとその間は“神無日”。新しい年が誕生する時に、無防備にも神様ご不在という非常事態である。そこで人々はひたすら行いを謹んで正月の準備をしたあげく、神々を迎えての喜びの行事が十五日(元宵節)まで続く。新年最初の満月の日である。

そこでこの間に凝縮される人々の集落繁栄や豊年満作、子孫繁栄、無病息災、諸願成就等への祈りを紹介したいと考えた。人類普遍の祈りの中国版である。その“風景”こそが口承文芸の舞台なのだから。

中国の人々、といっても多民族国家のこと。漢族の紹介だけで済ませる法はない。そこで日本の古文化に縁の深い漢・チベット語族の農耕民から、白(ペー)族と苗(ミャオ)族を選んだ。白族は雲南省大理白族自治州に集居し、かつて「大理」という強力な王国を建て、漢族の文化を受容する水稻耕作民である。対して苗族は貴州省に集居するが、広西壮族自治区や雲南省はおろか遠くタイやベトナムの山岳地帯まで広く散居している(メオ族)。文字を持たないかわり口伝による山地の高文化を保ち、歴史的に漢族との接触を避けてきた。対照的な二民族である。

幸いにも、当学会にフィールド・ワークを積まれた最適な会員がおられる。「漢族の正月風景」には鈴木健之氏(東京学芸大学教授)、「白族の

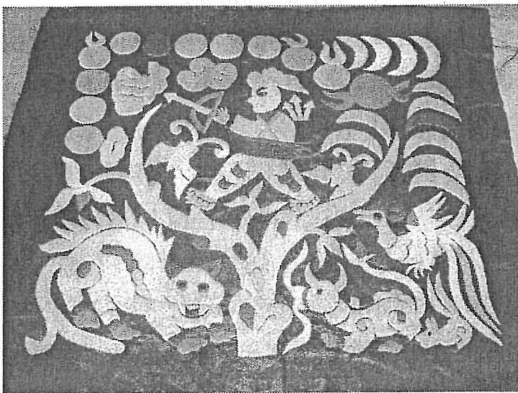
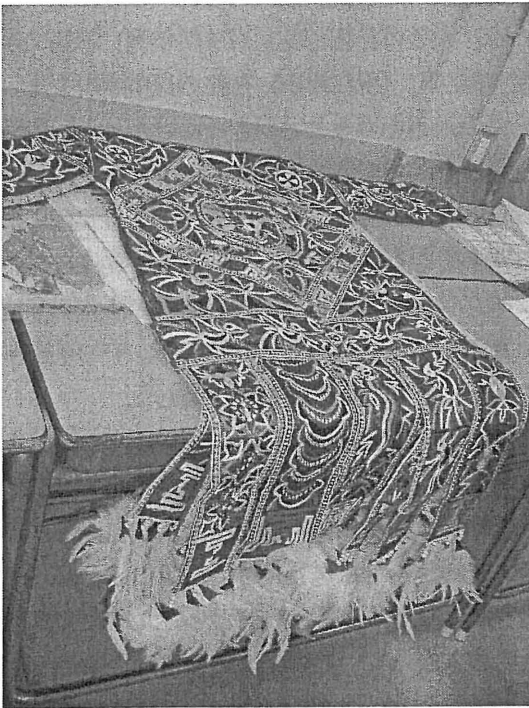
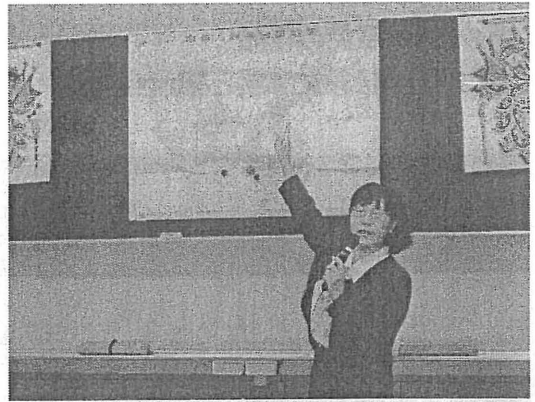
正月風景」には川野明正氏(東京理科大学専任講師)、「苗族の正月風景」には鈴木正崇氏(慶應義塾大学教授)である。

私たちは慶應義塾大学で数回の話し合いを持ち、メールや電話で打ち合わせを重ねた。そして正月にまつわる神話伝承は時間の節約のために日本語訳を配布すること(33事例)、正月の風景については年画や甲馬(祭祀用の木版画)、切紙、衣装、刺繍、染物、結といった民族造形はじめ、ビデオ・DVD・スライド等も活用して、出来る限り立体的に紹介することとした。更に三氏は「中国の正月風景—春節の行事習俗とその由来譚」雲南省白族の春節「苗族の新年風景—来訪神と祖先祭祀」なるレジュメも用意された。

当日、鈴木健之氏は重要な「暦法」や「臘月」の説明から「竈神」「年」「福」「元宝」等の物語、日本へ及ぼした影響等を、『荆楚歳時記』を掲げて泉の水が湧く如く話された。広大な土地と悠久な歴史のある漢族地域のこと、どれほど時間があっても足りるものではない。川野明正氏も雲南省全域で蒐集した貴重な甲馬を次々に示しながら(祭祀後は燃やして煙にするので、蒐集は困難)白族の神や鬼類(異常死者の靈魂)、精霊(動物精や自然物の変化した霊)の世界に誘い、漢族と同じ「竈神」や「門神」「対聯」「打春牛」等の習俗も紹介された。鈴木正崇氏は貴州省と広西壮族自治区の苗族の、主に正月に出現する仮装の来訪神「モウコウ」や「マンガオ」の習俗、風香樹という鶏を戴く神柱を巡って歌舞する習俗等を、スライドを通して色彩豊かに紹介された。二民族の対比は際立った。

手元には紹介しきれなかったビデオやスライド類が残った。展示した民族造形は手にとってじ

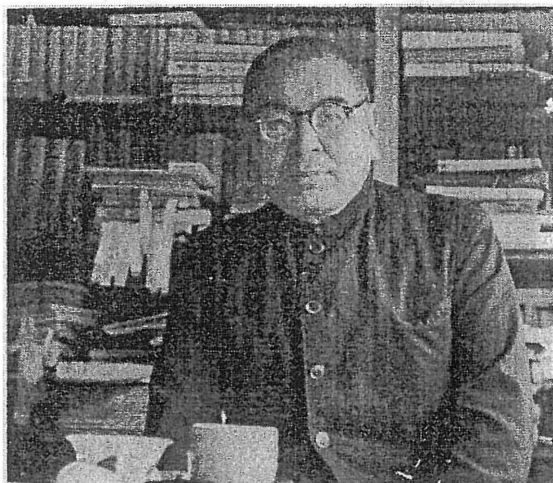
じっくり見ていただきたかった。美術品ではないのだから。それらの由来や効力等をもう少し詳しく紹介し、最後はきちんと「総括」すべきだった。中国の友人にも一言ずつお願いすればよかった等反省点ばかりが浮かぶが、どのみちすべてを会場に取り籠むことは無理な業。正月の多様な“風景”の一端だけでも見聞きしていただけたとすればせめてものことである。終了後、民族造形資料を写真に撮る方や「面白かった」と感想を述べてくださる方等おられ、少し安堵したことであった。(東京都)



森脇太一と石見の昔話

生誕 100 年記念文庫展と講演会開催

田中瑩一



若き日の森脇太一氏



森脇太一文庫展

島根県石見地方の昔話や歌謡の収集に力を尽くした森脇太一（1906～1977）の生誕 100 年を記念した文庫展と講演会が出身地の島根県江津市で開かれた。

「森脇太一文庫展」（2006 年 9 月 12 日～17 日）では、没後江津市図書館に寄贈された森脇の蔵書の中から民俗・民話関係書のほか未刊の調査資料や研究ノートも展示され、ふるさとへの一般の関心をかきたて盛会であった。

「記念講演会」（2006 年 9 月 16 日）では、「日

本の昔話研究における森脇太一の役割」（石井正己東京学芸大教授）並びに「民話からのメッセージ」（田中瑩一島根大学名誉教授）の二つの講演が行われた。石井氏は森脇が地域のフィールドワークに徹することによって中央の研究者の枠組みに収まらない種類の伝承をもすくいあげた点など日本の昔話研究に貢献したことを強調し、電子化によるデータの公開や語り聞かせ資料としての活用法などを紹介した上で「民話の香る、誇りあるまちづくりを」と説いた。

森脇太一が昔話調査に力を注ぐようになったのは、大著『邑智郡誌』（1937 年刊）執筆の過程で桜江町（現江津市）在住の民俗学者牛尾三千夫の知遇を得たことがきっかけだった。当時牛尾は昔話を広域的に調査することを企画し、石見地方 20 村の小学校の協力を得て児童による聞き書き資料を収集していた。牛尾は自らのライフワークである神楽と田植歌の研究が多忙になったこともあって、1939 年秋、その全資料を森脇に託し、継続調査を依頼した。

森脇は確認と補充のための現地調査を重ねるとともに自らも新しく語り手を見出して収集につとめ、以来没年に至るまで、地域別、語り手別の資料集を世に送り続けた。そのほとんどは謄写版による少数数の刊行だったために今日では希覯となっているので、以下に刊行順に一覧しておこう。（ ）内は刊行年。

- 1『大森昔話口碑伝説集』（1940）
- 2『高橋梅吉翁昔話集』
- 3『長谷村昔話集』（以上 1942）
- 4『石見昔話集』（刊記欠、1942 か）
- 5『長谷村の昔話と民話』
- 6『川越昔話集』
- 7『川本・粕淵・田所・井原・市山・谷住郷・三原・三谷昔話集』
- 8『都治昔話と伝説』
- 9『渡津の昔話・伝説・民話』
- 10『やすぎ村の昔話と伝説』
- 11『松川・国分・都野津・雲城の昔話と民話集』
- 12『邇摩郡昔話第二篇』
- 13『鹿足郡昔話』
- 14『美濃郡昔話』
- 15『富山と鳥井の昔話と民話集』（以上 1954）

16『佐々木茂さんにきいたむかし話』(1968) 17『江津の昔ばなし(話者山崎マスノ)』18『嘉戸シゲノさんからきいた話』(以上1973) 19『田中為五郎昔話集』20『上田喜治むかし話集』21『上田喜治むかし話集附録』22『跡市の昔話集』23『井澤の昔話集』24『清見の昔話集』25『桜江町長谷地区昔話集』26『岡本ツル昔話集』27『高橋スエ昔話集』(以上1974) 28『浜田の民話と史話一』29『浜田の民話と史話二』30『佐々山義雄メモ・伝説・民話』(以上1977)。

(島根県)

中国歌掛け調査の旅から

花部 英雄

暮れから新年に掛けて、中国貴州省の岩洞という村に滞在した。「東アジア圏の歌垣と歌掛けの基礎的研究」(國學院大學、辰巳正明代表)の調査団の一員として当地に来たのである。一週間余の短い期間であったが、中国の活気と逞しさ、少数民族の大らかさに触れたような気がする。年の明けた1月3日の今日、無事日程通りの調査を終え、これからバスで一日かけて貴陽空港へと移動する。夜来の雨に濡れた赤茶けた大地を走るバスの中で、この原稿を書いている。年頭の所感に代え、この旅を振り返りながら日本の口承文芸の今後について思いついたことなどを記してみたい。

車窓から見える美しい棚田や段々畑の風景、滞在した岩洞の人々の暮らしは1970年代の日本の農山村によく似ている。板葺きの粗末な家の中は満ち足りているとは言えないが、しかし、異国の調査員を見る好奇心まなざしの奥には温かい心がある。それは、近年の日本の農漁村を歩いていて感じるものが少なくなったが、30数年前の学生時代に調査した頃には確かにあったはずのものである。

ところで、世界的に希少価値となった歌掛けを、中国西南地区に住む文字の持たないトン族の人々

は今も大事にしている。「鼓楼」の中での男女の対歌や、数人の男が糸紡ぎや刺繍仕事に励む女のもとを訪れ、掛け合いで歌う「坐夜歌」は、今も行われている。挨拶から始まり恋のかけひき、成就の喜び、悲恋や怨みなどの内容が切々と歌い上げられる。相手の歌に応じて、歌群の倉庫から引き出される相互の歌が一つの流れを構成し、その場限りの恋歌のアンソロジーを現出する。歌い手、聴き手ともに、その世界を遊泳する。文字以前の歌の姿を確かに彷彿させるもので、これほど美しく完成されているものも少ないであろう。ウタとは何かについて深く考えさせられる。こうした対面歌唱による歌は、日本では現在、奄美大島などの一部を除いてほぼ消えてしまったと言っている。トン族の歌は、日本の古代歌謡から民謡、あるいは「紅白歌合戦」までをもとらえる、豊かな視点や方法を与えてくれるにちがいない。

さて、上記の歌掛けの事例は、日本の口承文芸研究が国内に留まることなく、比較研究を通すことによって大きな成果が得られることを示唆している。それによって一国の口承文芸の調査、研究がいつそう緻密になり、精度を高めていくことにもなろう。それは歌に限らず、語りや話の世界においても同様といえる。ここでは触れないが、神話、民間故事とも関わりの深い侗族の歌は、日本の昔話、語り物等の発生を考える上で魅力的なテーマを与えてくれる。グローバル化した現在、国境や言語を越え、そして文字をも突き抜けた口承文芸研究の必要性を強く感じる。水煙にかすむ光景を見るともなく、そんなことをつらつら思いながらバスに身を預けている。

(神奈川県)

事務局より

《寄贈図書》

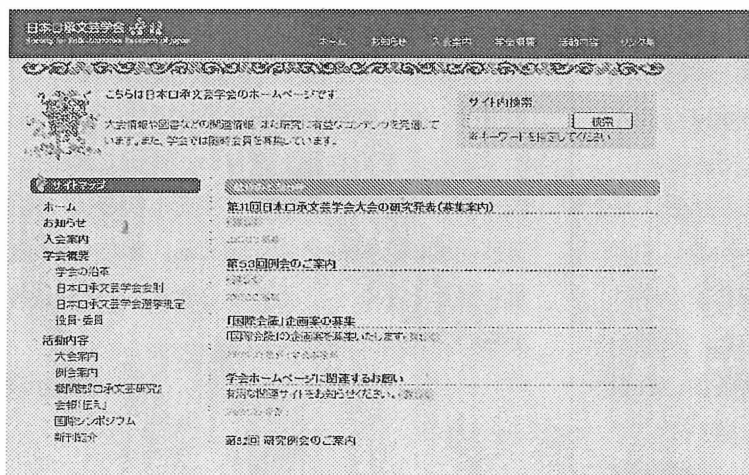
- ・ 『国立歴史民俗博物館研究報告』第127集～第133集
- ・ 『新潟県立歴史博物館研究紀要』第8号
- ・ 『増補 わらべうた文献総覧解題』無明舎出版
- ・ 柳田國男記念伊那民俗学研究所
『伊那民俗』第68号、『伊那民俗研究』第14号
- ・ 神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第39巻8号～11号

《学会ホームページに関連するお知らせ》

学会ホームページをリニューアルしました。

新しいURLは、 <http://ko-sho.org/> です。

ご覧のうえ、ご意見などをお寄せください。



〒263-8622 千葉県稲毛区弥生町1-3-3 千葉大学文学部 荻原眞子研究室内

Tel&Fax : 043-290-2310 / e-mail : shinko@bun.l.chiba-u.ac.jp

学会ホームページ : <http://ko-sho.org/>